

+

2022年

7月第1・2週の主日礼拝説教要約

・ 7月 3日：ヨハネ福音書 5：1-9.

「誰のトリアージ」

・ 7月10日：マルコ福音書 3：13-21.

「それぞれの任務」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

ヨハネ福音書の巻末に、「底本に節が欠けている箇所のある異本による訳文」として、5章3節の後半から4節の記事が掲載されています。

彼らは、水が動くのを待っていた。それは、主の使いが時々、池に降りてきて、水が動くことがあり、水が動いた時、真っ先に水に入る者は、どんな病気に罹っていても、癒されたからである。

ベトザタの池に臨む回廊(柱廊?)に病人が屯していた理由が、この箇所が追加されることにより鮮明となります。ただ、このように断定的に記されてしまうと、キリストの癒しの業と天使の業とが競合する恐れもありました。それが、おそらくこの箇所が割愛された理由だったのかもしれない。あるいは迷信として、斥けられたのかもしれない。

その人の病気が中風だったのか、あるいは、また別の病気だったのかは、今となっては不明です。「生れつき」という記述がないので、この人の年齢は38歳よりもはるかに上でした。40歳代半ばまでに9割の人が他界していた時代ですから、この「病人」は、それでも他の人々よりもはるかに長生きをしていたこととなります。

さて、その人がそこに居続ける理由は一つ、「水が動くとき、私を池の中に入れてくれる人がいない」からでした。もちろんそこに、自分の家財道具一式が揃っていて日常生活が送れたわけではありませんから、きっと誰かが定期的に病人たちの世話をしていたのでしょう。しかし、池の水面が動く時まで付き添って、癒される順番を決めること(トリアージ)に関しては、気が引けていたのは想像するに難くありません。あるいは、症状が劇症化している病人が、優先されたのかもしれない。真相は不明ですが、結果的にその人は、もしかしたら38年もの間、殆どずっとそこで、癒される日を待ち続けていたのかもしれない。

ある日のことでした。イエスは、その人の前を通り掛かります。ユダヤ人の常識では、その日は困っている人に手を差し伸べることさえも制限を受ける日(安息日)でした。

けれどもイエスは、その人のことを、見てみぬ振りせず、こう問い掛けます、「良くなりたいのか」。しかし答えは「はい」ではありません。その人は自分が不運にも、これまで体が良くなる機会を逸してきたこと

をイエスに告白します。誰も自分を池に入れてくれないのだと。もちろんその人は良くなりたくないではありません。ただ、残念ながら当日はその日ではないことを承知していたようです。池の水面も静止したままでした。

しかしその時、奇跡は起こります。間髪を入れず、イエスは彼に命じたのでした。「起きて、床を担いで歩きなさい」すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩き、そこを去って行ったのです。

ほどなくユダヤ人たちは、その人を癒したのがイエスであることを突き止めて、安息日にお前のしたことは違反行為であると咎めます。しかしイエスは、自身が安息日に限らず無休で働くのは、父なる神がそうしておられることの延長であると、彼らの警告を斥けたのでした。

説教 《 それぞれの任務 》

ヨハネ福音書の19章には、イエスの十字架の下にはイエスの母親とその姉妹がいたことが記されています。イエス自身にも兄弟姉妹(＝マリアとヨセフの子たち)がいて、マタイ福音書には、故郷の知人の発言として、「この人(イエス)は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか」という記述があります。つまりイエスは最小でも7人兄弟だったことがわかります。筆頭に記された兄弟のヤコブは後に「義人のヤコブ」と呼ばれるようになり、人々の尊敬を集め、イエスが去った後の、エルサレムの原始キリスト教会の重鎮と見做されるようになります。

さて、イエスが宣教を開始した頃にもどると、周囲の人々に、「あの男(イエス)は気が変になっている」と言い立てられて、困惑したイエスの身内の人々は、決断を迫られて、苦肉の策として、「(イエスを)取り押さえて来た」のです(マルコ福音書3:21)。けれどもその慌ただしさのさ中で、イエスは身内の者とは無縁の12人の者を使徒として定めており、彼らもこうした波瀾万丈のスタートを強いられていたのです。

神が人となったことで中東の古代社会に波風が立っていたことを、4つの福音書は包み隠さず報告します。宣教の始まりは、けっして一筋縄

では行かなかったのだと。

預言者、故郷に容れられず。

すでに諺と化しているこの言葉は、ルカ福音書の4章24節に記されています。ただ、マタイとマルコの両福音書の記述はルカのものと少々異なるもので、こうなります。

預言者が敬われないのは自分の故郷、(親戚や)家族の間だけである。

こちらは、おそらくルカ福音書よりもさらに古い形であると考えられます。マタイでは13章の57節に、マルコでは6章の4節に記されています。故郷だけではなく、親族や家族もまた同罪なのだとイエスは明言していたのです。

イエスなき後の原始教会に、イエスの親族が合流する歴史を記す使徒言行録の記者でもあるルカの立場からすると、イエスの最古の「明言」を、そのまま福音書に記載することには抵抗を感じていたようです。

使徒とは、言うまでもなくイエスの信者です。家族や親族とは性質の異なる立場です。両者の反りが合わないのは想像に難くありません。一つになるのは大変です。

けれども両者の内的変化が、あらかじめ神によって一つになるべく定められており、歴史上、合流が可能となったのだとすると、まさにここにライプニッツ(1646-1716)の形而上学的根本原理(予定調和)が作用していたと考えることができるのです。